

# 熱川温泉病院

4F病棟看護師 竹村 有紀

- 功 績** 亡くなった患者に施すエンゼルメイクを、家族に参加して頂き、その悲嘆を和らげるグリーフ（悲嘆）ケアとして実践した。結果、家族から礼状が届き、「お心の籠った送り化粧」として感動・感謝された功績。
- 推 薦 者** 瀬音 恵子
- 推 薦 理 由** 竹村は勉強会で、技量を磨き、意識を高め、研鑽を積む、そういう姿勢をよく見せます。従いまして、勉強会の成果をしっかりと身に着けた上で、今回、その場の業務をそつなくこなすのみに留まらず、家族の悲嘆を和らげ、感動に導くケアが出来たのだと思います。竹村を理事長賞にご推薦申し上げます。

## 内 容

---

4F病棟では、患者さんを亡くしたご家族が、悲嘆に暮れる場面を見る度に、何か出来ることはないか、という問題意識を持っていました。

そこで、病棟の「看取りケア」勉強会で、死化粧は「グリーフ（悲嘆）ケアとしてのエンゼルメイク」という位置付けがあることに着目し、その定義から手技まで勉強し、認識を深めて来ました。

そして今、学んできた「ケアとしての死化粧」実践に取り組んでいます。

その過程で、10月に亡くなり、竹村らがエンゼルメイクを施し、グリーフケアを実践した患者家族（内縁の夫）から、真心のこもったお礼の手紙を頂きました。（添付資料）

今回この手紙に述べられた感謝の趣旨には、少なからず、竹村がその場で実践した「悲嘆ケア」が映し出されています。

手紙には書かれていませんが、竹村はこの時、このご家族の悲嘆ぶりを拝見し、男性のご家族ながら、敢えて「患者さんも喜ぶと思いますので、メイクに参加していただけませんか?」と提案したそうです。すると、ごく自然に、患者の在りし日の姿を話しながら参加し、悲嘆の中にも喜びが面に現れていたとのことでした。

また、この手紙2ページ目の中ほど3行に「（葬儀の）参列者もデスマスクに感動」とあり、まさに「医療行為による侵襲や病状などによって失われた、生前の面影を取り戻す」というエンゼルメイクの定義に叶う「ケア」だったことを示していると思います。